

## 菅公 (菅原道真) 叙意一百韻 私訳

## 目次

- I 内容
- II 作家年譜
- III 作品 (詩編)
- IV 菅公 (菅原道真) 『叙意一百韻』 私訳

## I 内容

日本漢詩史上最高傑作の一つと評されるころの、菅公 (菅原道真) が太宰府流謫の失意時期、〈孤独暗恨〉、血涙を以て綴った、『叙意一百韻』、二句一韻二百行に及ぶ長詩の私訳である。この詩型は、杜甫の長編詩など五言古詩を受け継ぎながら元稹と白居易 (白楽天、楽天は字) が完成させた至難の技の近代百韻である。

私事ながら、縁あって九州福岡に職を得て、〈東風ふかば〉、菅原道真ゆかりの地に住むに及び、菅公が交わり親しむべき懐かしき存在となり、その詩文集、『菅家文草』、特に左遷失意の時期、手に成る『菅家後集』に親近することになった。

折りを見ての拾い読みに、これはと思うものを拙訳、毎年の年賀の挨拶とした。しかし、〈孤独暗恨、血涙〉は新玉の年を寿ぐには場違いを悟り、寒中見舞い状に切り替え、心気あらたに、『叙意一百韻』、毎年十句二十年、思いを貫き、〈叙意千言裏 何人一可憐〉 (第199、200) の二句に辿り着き得た。

『叙意一百韻』訳註、これが本稿の内容である。

この二十年、畏友田淵晋也の賀状、身に余る褒め言葉、評価、或る年は、「これは外交辞令に非ず」との熱き励まし、これあっての私訳完結、忘るに忘れられぬ、依って、この稿、畏友追善の供養にとて筆を執った次第である。合掌。

## II 作家 菅原道真 (845 - 903) 年譜

- 845 承和12 生誕。父是善34歳の三男。漢学者、漢詩人、歌人。
- 850 島田忠臣女宜來子のぶきこ生誕、後の道真正室。
- 855 初の詩作、『月夜見梅花』事項年譜巻末参照、父の門人、後の義父島田忠臣作詩指導。
- 862 文章生モンジョウショウ合格。
- 870 文章得業トクゴウ生方略試受験 (最上級の官吏登用試験)、合格。正六位下、官途に就く。
- 872 渤海客使任官、渤海王に答える勅書起草。母死す。
- 880 父是善死す。後を継ぎ菅家廊下を主催。菅家廊下 (文章道博士家菅原氏の私塾)。
- 886 讃岐の守、三月着任。秋、初の白髪見つける。
- 888 阿衡問題、朝政渋滞、憂慮した道真、讃岐より上京その進言により解決。宇多天皇の知遇を得て、以後異数の余る栄進の道開ける。(阿衡、中国の官名。位のみ宰相で、その職務の有無を巡る事件)。
- 890 脚疾と頭瘡を病む。
- 893 参議兼式部大輔、勘解由長官、飛ぶ鳥の昇進ぶり。新撰万葉集 (万葉集の漢訳) 道真の手になるものか、何処まで関係していたか諸説ある。  
翻訳の一例 奥山ニモミヂ踏ミ分ケ鳴ク鹿ノ声キクトキゾ秋ハ悲シキ  
秋山寂寂葉零零、麋鹿鳴音数処聆、勝地尋来遊宴処、無朋無酒意猶冷  
遣唐大使兼任。道真、進言に基づき遣唐使を停止。
- 897 従三位中納言。権謀家藤原時平、弱冠26歳、道真と同位階に列ぶ。
- 899 2月14日右大臣兼右大将。同日時平、左大臣兼左大将。学者の大臣昇格は過去三人のみ、藤原氏以外は過去皆無。嫡室島田宣來子、五十の算賀、従五位下、宇多上皇菅原邸に御幸。道真顕栄の絶頂に達す。
- 901 1月7日従二位。同じく時平。  
1月25日昌泰の変、太宰府に左遷、2月1日京を発つ。  
左遷の理由は諸説あり定かならず。陰謀説 (天皇排斥。道真が娘の嫁ぎ先皇弟齋世トキヨシ親王を立て醍醐天皇17歳を廃すとの時平の讒訴)、藤原氏時平の他氏排斥の動き、等々。  
以下、参考までに、坂本太郎氏による現代語訳左遷の宣命である、

右大臣菅原朝臣は寒門より俄に大臣に取り立てられたのに、止足の分をしらず、専権の心があり、佞諂ネイテンこびへつらいの情を以て前上皇宇多を欺き、廃立を行って、父子の慈を離間し、兄弟の愛を破ろうとする。上辺の詞は穏やかだが、心は逆である。このことは天下みな知るところである。大臣の位におるべき人ではない。法律のまにまに罪すべきであるが、とくに思う所あり

大臣をやめ太宰権帥に貶する（政事要略）。これを以て、時平、藤原氏の権勢を確立したと言われる。

10月『敍意一百韻』なる。

903延喜31月 絶筆『謫居春雪』。2月25日 謫居にて薨ず。

以上、年譜は、川口、坂本両氏に準拠。

参考までに処女作と絶筆を合わせ並べて以下に。訳は川口氏に依り、\*印註は同氏のそれに準拠しつつ筆者が書き換えた。

月夜見梅花  
月耀如晴雪 月の耀くは晴れたる雪の如し  
梅花似照星 梅花は照れる星に似たり  
可憐金鏡轉 憐れぶべし金鏡かひろの轉きて  
庭上玉房馨 庭上に玉房の馨れることを

#### 謫居春雪

盈城溢郭幾梅花 城に盈ち郭に溢れて 幾ばくの梅花ぞ  
猶是風光早歳華 なほしこれ風光の 早歳この春の雪は、日の光にゆれうごく歳のはじめの花。の華  
雁足黏將疑繫帛 雁の足にねば む きぬ黏り將ては帛を繫けたるかと疑ふ\*  
鳥頭點著思歸家 鳥の頭さに點し著きては家に歸らむことを思ふ

\*雁の足に粘り着いた白い雪を、もしや天使が白帛（手紙）かと見てくれたらば

鳥の頭に点のように白い雪が着いていたら、

天使が射て匈奴に幽閉の蘇武の無事の便りと知られ助け出された故事もある、

鳥の頭が白くなったら帰国を許すと王にいわれた燕の太子丹の故事もある、我も帰京なきにしも非ずや

## 2. 作品 詩 篇

ここでは詩作品のみを扱う。散文、短歌等は触れず。

作品は、太宰府左遷の前後にそれぞれ一点、京都時代 55年、太宰府時代 3年。

京都時代 『菅家文草』全六巻、全詩 468 太宰府時代 『菅家後集』全一卷、全詩 39

以下は両詩篇の作風と文学史的位置という視点から、川口久雄、藤岡作太郎、山岸徳平三氏の卓説「道真詩論」、直接引用に依る紹介である。

### 1. 川口説

道真詩の世界は大きく分けて、きらびやか美しい世界と、平坦な寂しい世界とにわけられる。過剰なばかりの装飾をともなった典故を鏤めた官能的な芸術美の世界と、(略) 現実を直叙しようとする人生的な自然美の世界とである。(略) 前者は宮廷に勤務していた得意時代、後者は讃州ならびに鎮西の失意時代にことにあらわれる。(略)、[失意時代の作は] 幽憤断腸の感情を直叙する。(略) 牢獄からの遺言詩集、(略)、真の詩の美しさはかくして後集に極まり、日本漢詩はここに至ってはじめて抒情詩の生命の炎をしずかにもえたさせる。

### 2. 藤岡説

道真の詩に至りて殊に和臭を帯び来たれるを見る。[和臭ある漢詩は純ならずの反論に対して] しかれども詩を以て国民の性情を表現するものとすれば、道真のごときはすなはち国民的詩人の最たるものにして、唐詩を同化して和詩となしたるもの、その地位は漢詩全盛より和歌勃興に移る境界線にあり。

(国文学全史・平安朝篇)

### 3. 山岸説

道真の作が特に称揚せらるる事には、道真の境遇に同情する、言わゆる「道真びいき」による点と、道真の境遇や性格から来る作品の性格によるものとがある。即ち、道真の作品を通観すると、人情の機微にも出入りし、情意の自由な叙述や道真の誠実一貫の個性と、同情すべき環境とによって、生じたと思われる、悲懐的とか悽傷的とも称すべき気味の底流などを、感得させられるのである。それら

の条件が、道真の作品の評価を、高めさせる結果となる。(略)、[これらの背景を離れて、事実に基づき客観的にその作品を解釈すれば]、道真は、決して詩人的情熱を持つ、洗練された豊かな型の詩人ではない。鴻儒(学殖深い漢学者)としての博学強記の根柢に立って詩作し、しかも詩作の敏捷な詩人なのであった。(日本古典文学大系月報第二期第29回配本)

#### IV 菅公(菅原道真)『敍意一百韻』

詩句番号

生涯無定地	生涯不変ノ位階安住ノ地ナシ		
運命在皇天	運命ハ須ク大御神 <sup>おさむ</sup> ノ馭ルナリ		
職豈圖西府	思ヒキヤ官職鎮西太宰府トハ	延喜元年 901.1.25、左降の宣命、2月1日領送使に急き立てられ都落ち筑紫へ下向。	
名何替左遷	何事ゾ右大臣左遷ノ左ニ替ル	この時の官位は正三位右大将右大臣であった。	
貶降輕自芥	降格ノ輕キ塵埃ノ舞フニ同ジ		5
駟放急如弦	放逐ノ急ナル弓弦ノ矢ノ如シ	弓から矢が放たれるように。	
悞赧顔愈厚	<sup>はじ</sup> 悞テ顔色愈赤ク面ノ皮愈厚シ	悞赧テンダン、赧、赤くなる。	
章狂踵不旋	狼狽狂躁振り向ク暇モナシ	振り返る間もなく急き立てられて。	
牛涔皆埒穿	地ハ牛蹄ノ跡悉ク陷穿落シ穴	涔シム、道の溜まり水。我が身をはめる落とし穴。	
鳥路惣鷹鷲	空ハ鳥道総ジテ猛鳥ノ鷹ト鷲	鷹鷲ヨウセン、鷲ハヤブサ。我をうかがい狙い撃ちか。	10
老僕長扶杖	老僕ハ杖ニ扶リ放スコトナシ		
疲驂數費鞭	疲弊驂ニ鞭打ツ数ノイトドシ	驂ソエウマ、4頭立て外側2頭。	
臨岐腸易斷	別路ニ臨メバ腸断タルル思ヒ	西小路石上か、見送りの一行と別れる。	
望闕眼將穿	宮城望見スレバ眼穿タントス	東寺で昼食、淀で一泊か。	
落涙欺朝露	落ツル涕涙朝ノ露トモ見紛フ		15
啼聲亂杜鵑	我ガ悲鳴杜鵑乱レテ声ヲ失フ	我が泣き声に杜鵑顔色なし。	
街衢塵冪冪	街路四辻辺リ一面 <sup>あくたもくた</sup> 芥藻屑冪冪	冪ベキ、覆いかぶさる。	
原野草芊芊	行ク野辺ヤ春時ヲ得テ草芊芊		
傳送蹄傷馬	繼場蹄傷馬交替セズ送り出ス	道中諸国の駅舎は食、馬を給することを禁止、酷薄非情の西下を強いられた。	
江迎尾損船	水駅待迎フルハ艦破損セシ船		20
郵亭餘五十	宿場ナホ残スコト五十二余ル		
程里半三千	京太宰府間行程三千ニ半バス	1里、約650メートル。	
稅駕南樓下	駕カラ馬ヲ稅ス都督府南樓下	太宰府に到着、以下八句その時の光景と心身の状態。	
停車右郭邊	駕ヲ停ムル城内右京区ノ辺境		
宛然開小閣	高殿ノ小門開クヲ待ツゴトク	門の開くのを待ち受けた如く野次馬が。	25

観者満遐阡	観ル者大路ヲ埋メ尽クシヲリ	遐阡カセン、坊城の南北大路。	
嘔吐胸猶逆	嘔吐スルモ胸ナホ逆ヒ反吐ス		
虚劳脚且癢	虚劳心身衰弱脚マサニ引癢 <sup>つ</sup> ル		
肥膚争刻鏤	豊肌争ヒテ皺ノ刻ミ鏤 <sup>ちりば</sup> メラル		
精魄幾磨研	精魄生魂幾ソタビ磨潰 <sup>すりつぶ</sup> サレン	魄、肉体、魂、精神。	30
信宿常羈泊	所詮ハ二連泊仮ノ旅寝ノ草枕	信宿は二連泊のこと、官舎に移るまでの仮の宿。	
低迷即倒懸	痴呆低迷即チ逆吊リノ心痛苦	低迷、雲が低く垂れ込める様、鬱状態。	
村翁談往時	老イ里人来タリ往時ヲ語レバ		
客館忘留連	仮宿舎閉居ノ憂サゾ忘ラルル		
妖害何因避	妖害イカニカコレヲ避クベシ	妖=妖、殺す、妖害=殺害。	35
悪名遂欲蠲	立チニシ悪名遂ニ蠲 <sup>のぞ</sup> カントス	蠲ヤスデ、汚れ除去。以上二句、無実獲得切望。	
未曾邪勝正	未ダ邪ノ正ニ勝ツアラザリキ		
或以實歸權	或ハ信実ヲ権謀術数ニ帰スヤ	我が述ぶる真実を裏ある策と搦め取られるか。 cf. 年表。	
移徙空官舎	空 <sup>からっぽ</sup> 殻ノ虚シキ官舎ニ移リ住ム	榎木寺の辺りという。都府から七百米。	
修營朽松椽	朽チタル松材ノ垂木ヲ補修ス		40
荒涼多失道	荒涼周辺ノ道面 <sup>づら</sup> 凡ソ消エ失ス		
廣表少盈塵	東西南北狭キ宅地五十坪ナル	廣表コウボウ、東西南北の距離。塵テン、宅地の広さ。	
井壅堆沙甃	井閉塞砂ヲ外ニ堆ミ上ゲ甃ム	甃シュウ、井戸内壁に積む煉瓦/甃、石たたむ、煉瓦を積む。	
籬疎割竹編	籬荒レ疎ナレバ竹ヲ割リ編ム		
陳根葵一畝	葵一畝古キ根ノ露出晒サレテ		45
斑薜石孤拳	斑ニ薜ツキタル拳大ノ石一個	薜ヘイ、山芹。以上二句難解。荒れはてし菜園か。	
物色留仍舊	四辺ノ景ト情旧ノママ変ラズ		
人居就不悛	人居ハ就 <sup>なる</sup> ルトモ心気悛 <sup>あらた</sup> マラズ	人が住んだ今も外も内も住まいの気色は旧のまま。	
隨時雖褊切	陋屋鬱ナレド身ヲ時ニ委セテ	褊、狭いこと。切、親切、懇切の切。	
恕己稍安便	己ヲ恕セバ意 <sup>こころ</sup> 稍稍安ンズベシ		50
同病求朋友	同病相憐バントシテ朋ヲ求メ	人との交流は厳しき監視下にあった。友は過去の伝説上の賢者、下記の傳、范など。	
助憂問古先	除憂排悶如何セン古先ヲ繙ク		
才能終蹇剝	才能行キ泥ミ終ニ時運ニ泣ク	蹇剝ケン/バク,足なえ/害する。	

富貴本述遭	富モ位モ本来コレ久シカラズ	述遭チュンテン、停滞する。
傳築巖邊耦	傳説傳巖ニテ相方ト土ヲ築 <sup>つ</sup> キ	以下、配流の孤独暗恨を準えんとして作者道真が思いを馳せ 55 た古先の四人。賢人傳説フエツ、世を厭い傳巖フガンの岸壁で土方 仕事ををした。耦タグウ、二人組んで野良仕事をする。
范舟湖上扁	范ガ舟湖上一葉浮カビ流離 <sup>さすら</sup> フ	范蠡ハンレイ、会稽の恥を雪ぎ、禍が王に及ぶのを恐れ身を要な き者に思いなし小舟に乗じて去った。道真、我が身に準えた。
長沙沙卑濕	長沙ハ地低ク氣ノ邪濕甚ダシ	長沙に左遷の賈誼カギ、湘水に臨んで屈原を偲んだ。『屈原ヲ弔 フ賦』。
湘水水齋滌	湘江ハ水深クシテ渦卷キ流ル	齋滌インワン、水深く渦を巻く。屈原、讒に因り流罪、湘水に入水。
爵我空崇品	爵賜リ位極ムモ空シカリケリ	左遷（901年正月25日）の直前（7日）、従二位に叙さる。
官誰唯備員	我ガ官位誰ニカ唯 <sup>かず</sup> 員ヲ揃ヘル	後任はただ員数揃えの後釜なるべし。 60
故人分食噉	旧知ヨリ食餌分ケラレ噉 <sup>く</sup> ラフ	
親族把衣漣	親族衣類肌着ヲ手ヅカラ洗フ	食事、洗濯、西下道中のことか。
既慰生之苦	送生ノ苦既ニ慰メ癒サレタリ	
何嫌死不遄	何ゾ嫌フ死ノ遄 <sup>すみや</sup> カナラザルヲ	生き延びて冤罪を晴らさん。
春壘由造化	春壘ハ造化ノ神ノ恵ミナラン	春壘ショウセイ、食べ物。 65
忖度委陶甄	心ヲ思ヒ忖ルハ陶甄ニ委ネン	陶甄トウケン、瓦。陶人が瓦器ヲ作ルコト、転ジテ、聖王ガ天下 ヲ治メル、万物ヲ化成する。（諸橋漢和辞典）
荏苒青陽盡	荏苒トシテ春三月ハ尽キタリ	
清和朱景妍	初夏四月朱景目映ユク艶タリ	朱景、太陽。
土風須漸漬	土風ハ徐徐ニ漬カリユクベシ	土風、習俗、風習。
習俗擬相沿	習俗ハ相沿フテ擬 <sup>はか</sup> リユクベシ	70
苦味鹽燒木	木ヲ燃ヤシテ苦味ノ塩ヲ造ル	この一句難解、讃岐時代に見た製塩と比較してか。
邪贏布當錢	邪シマニ贏 <sup>え</sup> タル反物ヲ換金ス	贏エイ、得る。
殺傷輕下手	殺人傷害命ヲ輕ンジ手ヲ下ス	
群盜穩差肩	群盜列ンデ穩ヤカニ町ヲ流ス	肩を差す、列ぶ。
魚袋出垂釣	魚袋ヲ隱サズニ釣糸ヲ垂ラス	魚袋ギョタイ、元は役人の通行証、身分証。正装時腰に下げた具 75 金銀の魚の模型をあしらった装飾品。
箒篋換叩舷	棹ニ換エ屏篋以テ船端ヲ叩ク	箒篋ヘイセイ、車の後部に懸ける埃よけの竹篋。叩く、歌の拍子取り として（吉田照子説）。
貪婪興販米	貪欲ニ利ヲ婪リテ米ヲ興販 <sup>ひき</sup> グ	
行濫貢官綿	粗悪紛物ノ綿官ニ没収セラル	行濫ギョウラン、粗悪な模造品。参考：「にせものを筑紫綿（絹） と偽って役所に納税する」。 （吉田照子訳）
鮑肆方遺臭	鮑ノ店方 <sup>まさ</sup> ニ鼻ヲ突ク悪臭漂フ	鮑、しおうお、くさやの類いか。異臭、不善悪習の意に通ず。
琴聲未改絃	琴声未ダ弦ヲ改メズ調べ不変	悪しき風俗を未だ改めず。 80

「土風ニ漬カリ、習俗ニ相浴フ」(69、70句)との心境も、度し難き博多津の俗悪、風紀紊乱に躓いた。

與誰開口説	誰ト口ヲ開キ心ノ内ヲ説カン		
唯獨曲肱眠	肩肘曲ゲテ唯独リカモ寝ヲヌ	肱ヲ曲ゲテ之ヲ枕トスル(論語)。	
鬱蒸陰霖雨	蒸暑長雨鬱情トシテ陰々滅々		
晨炊断絶煙	朝ノ炊飯断エテ炊煙マタ絶ユ		
魚觀生竈釜	長雨竈釜ヲ水甕ニ遊漁觀ラル	雨水で竈や釜が金魚(ぼうふら)鉢となる。	85
蛙咒聒階甌	階ノ石瓦蛙鳴呪文ウタテ聒シ	咒、呪。聒カツ、かまびすし。甌セン、かわら、敷きがわら。	
野豎供蔬菜	野豎ガ蔬菜持チ来タリ供エル	野豎ヤジュ、村童。	
厮兒作薄饘	厮兒ガ薄キ水粥ヲ作り供エル	厮シ、雑役のしもべ。	
瘦同失雌鶴	瘦細リ雌失イタル瘦鶴ニ同ジ		
飢類嚇雛鳶	身ノ飢餓ハ雛ヲ嚇ス鳶ノ類ヒ	雛ヲ嚇オドス鳶、腐鼠を得た飢鳶が奪われまいと怯えて雛(鳳の雛、雛ながら大型)を脅かす。道真、飢餓の苦。	90
壁墮防奔溜	壁墜チ軒下ノ奔流堰カルルモ		
庭溼導濁涓	濁水涓々トシテ庭泥沼ト化ス	涓ケン、細い水流。	
紅輪晴後轉	晴ルレバ紅輪マタ天ヲ転グル		
翠幕晚來褰	夕サレバ翠キ靄ノ幕マタ褰ル	褰ケン、かかげる。	
遇境虛生白	事ニ遇ヒテ虚タレバ心空ナリ	虚心坦懐。	95
遊談時入玄	遊談時ニ老莊ノ玄理ニ通ゼン	玄理、無為自然。以下、98、99句に続く。	
老君垂迹話	老子ノ君仏ニ垂迹スノ話アリ	仏陀が衆生済度のため仮に老子の姿をとって出現したとの逸話。	
莊叟處身偏	莊叟ノ爺処世ニオイテ偏タリ	老子には政治的関心が見られるに対し莊子にはそれがなく個人の安心立命)が関心事となっている(中国学芸大事典)。	
性莫乖常道	人性天ノ道ニ乖キ離ルルナシ	乖、ソムク。	
宗當任自然	人生自然ニ委スヲ宗トスベシ		100
慤勸齊物論	重く深く委曲ヲ尽クス齊物論	齊物論・寓言篇、善悪生死等一切の対立差別を無とする莊子の觀念哲学論。莊子が胡蝶に、胡蝶が莊子になったのか。「胡蝶の夢」	
洽恰寓言篇	マサニ我ガ意ニ的中ス寓言篇		
遺致幽於夢	我ガ思索ノ跡夢ヨリ幽冥ナリ	遺致キョウチ、人がおこなった跡。	
風情癖未痊	風物情趣ヘノ詩癖イマダ痊ズ	風物情趣(自然の景と情)に醸される詩心と詩癖。	
文華何處落	詩ノ華何処カラ落チ来ルラン	「降るように詩の言葉が湧いてくる」(川口久雄訳)。	105
感緒此間牽	牢落ノ今モ詩魔ノ緒ニ牽カル	莊子に共鳴しながらもこの(詩の魔力)抗し難し。	
慰志憐馮衍	憑衍ヲ憐レビ思エバ心ノ慰ム	馮衍ヒョウエン、無実の流謫下獄にあつて節を曲げず志を貫いた。	

銷憂羨仲宣	憂ヲ消サントシテ仲宣ヲ仰グ	仲宣、事物に作者の感情を移入する詩形式「賦」の先人。	
詞拊觸忌諱	忌諱ニ觸ルレバ詞ハ拊ミ隱ス	拊カン、つぐむ。 忌諱、その筋の。	
筆秃迷僂癡	狂ホシク乱レテ筆ゾ秃 <sup>ち</sup> ビヌル	僂癡ソテン、錯乱。	110
草得誰相視	草稿ヲ得テ相見ル者誰カアル		
句無人共聯	聯句トモニ連ナラム詩友ナシ		
思將臨紙寫	思ユケバ紙ニ臨ミテ書キ写シ		
詠取著燈燃	詠ジテハ寒燈ノ火ニ著ケ燃ス	牀寒枕冷到明遲 臥シ戸寒ケク夜ハ明クルニ遲シ 再起燈前獨詠詩 獨マタ起キテ寒燈ニ詩ヲ詠メバ 詩興變來爲感興 詩興ハ自ズカラ物思フ心ニ變ジ 關身萬事自然悲 我ガ身ニマツハル萬事即チ悲シ 冬夜九詠（一）獨吟 菅家文草 この七言絶句、創作時の 詩人の心内、心気感興の一例として、参考までに。	
反覆何遺恨	反復ノ明暮ニ何カ恨ヲ遺サン		115
辛酸是宿緣	辛酸ハコレ世ノ宿緣ナルベシ		
微々拋愛樂	微々春心愛欲ノ妄念拋ゲ捨テ	愛樂アイギョウ。	
漸々謝葷膾	漸々五葷腥膾ヲ謝シテ断タン	五葷腥膾ゴクンセイセン、蒜、韭など五種の野菜と生臭い獣肉。	
合掌歸依佛	身命投出シ仏ニ帰リ依リ合掌	老子、莊子を経て仏教信仰へ誘なわれる。	
廻心學習禪	自力ノ執念捨テ禪ノ実践修行		120
厭離今罪網	厭ヒ離レンウツツ六塵ノ樂欲	六塵ノ樂欲ギョウヨク。 人間心性を汚す六境。	
恭敬古眞筌	恭敬ス古ノ仏陀ノ説キシ悟リ	恭敬、クギョウ/キョウケイ。 筌セン、目的達成の手引き書。	
皎潔空觀月	月輪皓潔ヲ仰ギ見レバー切空	皓潔コウケツ、白く汚れなきこと。	
開敷妙法蓮	<sup>あまね</sup> 敷ク開花スル仏法ノ妙法蓮華	法華教一乗＝妙法蓮華經	
誓弘無誑語	弘ク救済ヲ誓フ仏ノ約誑サズ	誑タブラカス。	125
福厚不唐捐	善行信心ノ福分篤ク疎ナラズ	唐捐トウエン、無駄に捨てさせる。	
熱惱煩纒滅	溽暑心身熱惱ノ煩纒シク滅ス	纒サイ、少し、わずか。	
涼氣序罔愆	立夏立秋炎涼ノ時候ハ愆タズ	罔ボウ、なし。 愆ケン、あやまつ。	
灰飛推律候	葭灰ノ飛動ヲ見テ節季ヲ推ス	雅樂調律用の笛に灰を入れ吹いて笛の音と灰ノ飛び方から節季を推した。	
斗建指星躔	北斗ノ柄星躔ヲ指シ時ヲ告グ	斗建、北斗七星の指針。 星躔セイテン、天体の運行。 人間の命運 130 は北斗が統べる。「北斗は冴えて影うつる、星の妹背の天の川」（曾根崎心中）。	
世路間彌險	世路我ヲ隔チ生路ノ愈々險シ		
家書絶不傳	家書絶エテ京ノ消息伝ハラズ		
帶寬泣紫毀	帶寬ミ紫色オチ褪スルヲ泣ク	紫、官服。 紫色、禁色キンジキの一つ。	
鏡照歎花巔	照シテハ鏡ニ巔ノ花キヲ嘆キ	巔テン、頂。	
旅思排雲雁	雲ヲ排 <sup>ひら</sup> キ行ク雁ニ旅ヲシ思ヒ		135

寒吟抱樸蟬	寄ヘテハ樸抱キ鳴蟬ニ寒吟ス	樸、山から切り出したままの木。	
一逢蘭氣敗	一タビ逢フ蘭ノ香氣失セ敗チ	敗、しばみ落ちる。寂寞蘭ノ敗ルヲ傷ム（歐陽脩）	
九見桂華圓	九タビ迎エ見ル桂華ノ円ナル	桂華、月。	
掃室安懸磬	陋室清掃安ンジテ磬ヲ懸クル	磬ケイ、中が空洞の打楽器、架に下げて打つ。	
扃門嬾脱鍵	門扃シ嬾惰モノノ憂ク鍵ヲ脱ク	扃ケイ、閉ざす。嬾惰ランダ=懶惰ライダ	140
跛牂重有繫	蹇跛ノ羊ナホ重ネテ繫アリテ	蹇跛ケンハ、あしなえ。牂ソウ、雌羊。繫チュウ、ほだし。	
瘡雀更加攀	瘡病ノ雀ハ更ニ加ヘテ攀アリ	攀レン、ひきつり。脚疾と頭瘡を病む（年譜 890年）。	
強望垣牆外	狂ホシク望ム垣内闌牆ノ外ヘ	闌牆カンシャウ、牢舎。	
偷行戸牖前	人目偷ミ忍ビ行ク戸牖ノ前ヘ	牖ユウ、壁を穿ち木材を縦横に組んだ明かり取りの窓。	
山看遙縹緑	山ハ看ル遙カナル山色青緑ヲ	山と水は太宰府に実在する、京と同名の東山、白川。	145
水憶遠潺湲	水ハ憶フ遠キ細流潺湲ノ音ヲ	潺湲センカン、せせらぎ	
俄頃羸身健	羸弱ノ身モ俄頃今ハ健ニシテ	羸ルイ、疲れ力衰える。俄頃ガケイ、暫くの間は。	
等閑殘命延	等閑ノ殘命ノ生き延ビテアリ	山河の情景に京国と我が身蘇生、しばし生き衝き魂魄狂おしく聞 ぎあう。魄は形、目、肉体。魂は想、精神。	
形馳魂怳怳	形魄馳ストモ精魂ハ恍惚タリ	怳コウ、恍惚。茫然自失タリ。	
目想涕連連	目デ想ヘバ涕ゾ連綿ト流ルル	京國の景を目想すれば心情連綿滂沱。	150
京國歸何日	京国帰ル何レノ日ニカ在ラン	以下、五十句、京国における半生の経歴、栄光と毀誉褒貶、転落 西下の〈問わず語り〉。	
故園來幾年	帰り来テ故園ニ立ツハ幾年カ	故園、東の京宣風坊なる菅原邸宅の庭園。一株の梅あり。「花ノミ 独り笑ミテ我ハ悲シビ多キ」（梅花 菅家後集）。	
却尋初營仕	却尋スル初仕官正七位少内記	二十六歳、詔勅・宣命の起草など宮中の記録掛。	
追計昔鑽鑿	追計ス堅キヲ鑽リ微ヲ研ギシ	以下、京国、思い出の半生。 文章生受験勉強。	
射每占正鵠	射ル毎ニ弓矢ハ正鵠ヲ得タリ	試験を弓矢に喩えた。	155
烹寧壞小鮮	烹ルニ如何ンゾ小鮮ヲ壞サン	小鮮、小魚。「大国ヲ治ムルハ小鮮ヲ烹ルガ如クス」老子。	
東堂一枝折	東堂ニオイテ桂林一枝折リシ	一枝折、方略試験。最上級国家試験、超難関、過去 230 年の合格 者僅か 65 名と言う。	
南海百城專	南海道讃岐守百城治世專念ス	41 歳、初の離京、異例の人事。「分憂ハ家業ニ非ズ」（道真言）。 国司の職は〈憂イヲ分クル〉と言われた。	
祖業儒林聳	菅家三代差継ギ儒者聳エ立ツ	祖父子三代、文章博士。	
州功吏部銓	式部省モ銓ム讃州長官ノ功德	吏部リホウ、式部省の唐名。	160
光榮頻照耀	官位ノ昇進頻リニ光榮照耀ス	左中弁、勘解由長官、参議など。	
組珮競榮纏	組珮ハ榮ヲ競ヒテ列ニ纏綿ス	組珮ソハイ、玉や官印等を留め結ぶ帯、組紐。	
責重千鈞石	官職責ノ重キコト千鈞ニ値ス		

臨深万仞淵	ソノ深キコト臨メバ万仞ノ淵		
具瞻兼將相	殿上人將相兼任ノ余ヲ具瞻ス	具瞻グセン、多数が崇め見る。將相（將軍や宰相）兼任、	165
僉日缺勳賢	閣内 <sup>みな</sup> 僉日ク余勳賢ニ缺クルト	道真この時、権大納言右大将、右大臣右大将、 勳功、賢明に欠けると。	
試製嫌傷錦	試ミニ裁チテ錦帛ヲ傷ムルヲ		
採刀慎缺鉛	鉛刀採リテ刃毀ツヲ懼レ慎ム	試製、鉛刀（身の鈍刀の譬え）とは、政務において事を為すに、 鉛刀の刃毀れ、即ち裁断の失敗を恐れ慎重であったの意。	
兢兢馴鳳辰	兢兢トシテ玉座ノ屏風ニ馴レ	兢兢キョウキョウ、畏れ慄く。鳳辰ホウイ、玉座の屏風。次句の龍泉、 龍泉県の水で鍛えた劍が龍に化したの故事。	
慄慄撫龍泉	慄々トシテ宝剑ノ龍泉ヲ撫ヅ	兢兢、慄々、宇多天皇破格の寵遇、常に玉座に侍らせた。	170
脱屣黄埃俗	屣ヲ脱ギテ俗世ノ黄塵ヲ掃ヒ	屣ヲ脱グ如ク俗世の埃を払い禁中殿上人となった。	
交襟紫府仙	紫府ニ登リ殿上人ト襟ヲ交ス		
櫻花通夜宴	春ハ櫻木通夜スガラニ花ノ宴		
菊酒後朝筵	秋ハ菊酒觀菊後朝重陽ノ詩筵	重陽、陽数九の重なり、陰曆九月九日、菊の節句。	
禁中密宴、余每預之	禁中ノ密宴、余ツネニ之ニ預カレリ		
器拙承豐澤	器拙キ宰相ノ余豊沢ヲ賜レリ	豐澤、潤いをもたらす雨、恩徳。	175
舟頑濟巨川	頑 <sup>ふなをさ</sup> ナシ船長ノ余巨川ヲ濟 <sup>わた</sup> レリ	国政の舵を執った。	
國家恩未報	國家ノ恩ニ報イザル未ダシヲ		
溝壑恐先填	溝壑 <sup>うづ</sup> ニ填モレンヲ先ズ恐ルル	溝壑コウガクに填る、野垂れ死にすること。溝壑は谷間。	
潘丘非忘宅	潘丘家ヲ忘レ捨テ出タニ非ズ	「家を出たるは任官のため、故郷に戻りたし、だが君命に背くのは は畏れ多し、先ずは治世に献身、慎んで職務を全うせん」（文選、西征賦）。	
張衡豈廢田	張衡 <sup>かり</sup> ハ田ノ贅ヲ諫ムモ廢レズ	「國王驕奢にして法度に從わず、張衡は威嚴をもって統治せし、だが、 世の中次第に乱れて、志を叶える能わず」（文選）。	180
風摧同木秀	風ニ摧 <sup>をれ</sup> ルハ木ノ秀ヅルニ同ジ	出ル杭ハ打タレルの譬え。	
燈滅異膏煎	燈ノ消ユルハ膏ノ煎ルニ非ズ	煎イル、燃えて消える。膏火自煎、油ハ自ラ燃エテ消滅スル（莊子）。 余は燃え尽くす前に消された。	
苟可營々止	苟モ奸人ハ營々ト役ニ留マル		
胡爲脛々全	何スレゾ脛々トシテ全カラン	脛々、堅く融通がきかぬさま。真っ正直に身を全うする。	
覆巢憎穀卵	巢ヲ覆シ卵ヲ憎ミテ叩キ割リ	穀カク、卵の堅い殻。	185
搜穴叱蜚蜾	蟻穴ヲ搜シ蜚蜾叱メ追立ツル	蜚蜾チエン、蟻の卵。叱る、責める。	
法酷金科結	法ハ金科結ブヨリモ苛厲酷シ	金科結、法令の定むるところ。苛厲カレイ、厳しい。	
功休石柱鐫	我ガ功績石柱ニ鐫ル中止サル	鐫、ほる	
悔忠成甲冑	忠信以テ甲冑ト成セシヲ悔ユ	君の鎧甲と成ろうと思ったこと。	
悲罰痛戈鋌	罰ノ戈鋌ヨリ痛キ憂イ悲シム	戈鋌カセン。鋌は小型の戈、手戈。	190

瓊瓊黄茅屋	黄茅ヲ葺ケル狭ク小ナル官舎	瓊ソウ、瓊の異体字。黄茅、屋根葺き用の茅。	
荒荒碧海壖	荒波激浪打チ寄スル碧海ノ壖	碧海、玄界灘。壖、ミギワ。	
吾廬能足矣	我ガ草廬ノヨク足ンヌルカナ	廬リョ、小屋。	
此地信終焉	此処ゾ信ニ終焉ノ地別所ナル		
縱使魂思峴	タトヒ魂ノ峴ニ思ヲ馳ストモ	峴、湖北省の山。峴山を愛し、「百年後も我が魂登る」との古人の述懐あり。	195
其如骨葬燕	若シ骨ノ燕ニ送り葬ラルレバ	其如、それでも若し仮に。燕、峴の遙か北の地。道真、「京國歸何日」、帝京を思うも筑紫に葬られた。	
分知交糾纏	命分ハ交糾ヘル纏トハ知リヌ	纏テン、縄。	
命誰質筵簞	誰カ運命ヲ筵簞ニ質スヤアル	簞テイセン、草木の枝と竹を以てする占い。	
敘意千言裏	我ガ意ヲ叙ブル千言ノ肺腑ニ		
何人一可憐	何人カ一度憐 <sup>かな</sup> ビ感シムヤアル		200

菅公（菅原道真）『敘意一百韻』 延喜元年 901 十月

高藤冬武

百万遍 16 号 テキスト、参考文献

テキスト

川口久雄校注 『菅家文章・菅家後集』、岩波日本文学大系、岩波書店、1976 年

同上書月報（川口久雄、藤岡作太郎、山岸徳平、執筆）

坂本太郎 『菅原道真』、吉川弘文館、1997 年

吉田照子 『菅原道真 解釈と鑑賞』、福岡女子短大紀要 No. 76

事典

中国学芸大事典、大修館書店 1978 年

日本古典文学大辞典 第 3 卷、岩波書店 1984 年